

特集：アジアの色彩

論文

慣用色名の日中比較研究

A Comparative Study of Japanese and Chinese Conventional Color Terms

林 嵐娟

Lanjuan Lin

大阪市立大学大学院文学研究科

Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University

佐藤 昌子

Masako Sato

畿央大学健康科学部

Faculty of Health Science, Kio University

Abstract

Conventional color terms are mostly bimorphemic or trimorphemic terms in which names of animals, plants, minerals, etc., are used to help denote colors of objects. Color terms of this sort are found in the Chinese language as well as in the Japanese language. Our conceptions of animals, plants, minerals, etc., whose names are cited in these terms can help us imagine what colors they refer to, which is one of their most noteworthy features. However, since conceptions of objects can differ from culture to culture, it is predictable that, in some cases at least, equivalent conventional color terms, i.e., those named after the same object, will evoke significantly different colors in different cultures. To empirically test this prediction, we conducted a cross-cultural investigation of Japanese and Chinese conventional color terms and salient colors they evoke in Osaka, Beijing, and Shanghai. In this paper, we will present the results of our investigation, and analyze them in terms of linguistics and from the vantage point of what information color terms can convey. To be more explicit, we will examine the usages, linguistic structures, recognizability, and information-conveying capacity of Japanese and Chinese conventional color terms in an interdisciplinary and comparative way, and explicate how conceptions of objects affect interpretations of conventional color terms.

Keywords : conventional color terms, linguistic structures, recognizability, information-conveying capacity, comparison of Japan and China

要 旨

慣用色名は、動物・植物・鉱物などの呼び名を使って物体色を表す色名であり、その多くは2つあるいはそれ以上の形態素からなっている。このような色名は、日本語のみならず、中国語にも存在し、いずれの言語においても、動物・植物・鉱物などの認識が慣用色名によって表される物体色を理解するのに役立てられている。しかし、物体の認識は文化によって異なることがある。したがって、少なくともある場合には、同じものに由来する等価な慣用色名でも、そこから思い浮かべられる色が文化によって著しく異なることが考えられる。この考えの妥当性を検証するため、筆者らは、大阪・北京・上海において、日本語と中国語の慣用色名と、それらが表す色の比較調査を行った。本論文において、私たちは、その結果を提示し、言語学的角度から、また、色名はどのような色を伝達するかという観点から、それを分析する。より具体的に述べれば、日中慣用色名の用法、言語構造、認知度、および伝達能力を、学際的手法によって比較考察し、慣用色名が表す色の認識にももの認識がどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

キーワード : 慣用色名、言語構造、認知度、伝達能力、日中比較

1. はじめに

日本工業規格(JIS Z8102:2001)の「物体色の色名」によれば¹⁾、慣用色名は「慣用的な呼び方で表した色名」と定義されている。この「慣用的な呼び方」には、主として動物・植物・鉱物や自然現象などを表す名詞が用いられている^{注[1]}。他方、中国の国家标准(GB)に「慣用色名」という規定はない。しかし、1957年に中国科学院で編集された『色譜』には、日本の慣用色名に似た性格を持つ中国の色名が収集されている。それらの色名は、合計625個あり、日本の慣用色名と同じく動物や植物などに由来する慣用的な呼び方で表されている。本研究で扱う中国の慣用色名は、この『色譜』をもとに日本のカラープランニングセンターが1979年に編集した『中国色名総覧』から選定したものである^{注[2][2)}。

慣用色名は、色名が由来するもの、すなわち、動物・植物・鉱物や自然現象などが、いわば「参照点」となって色やイメージを連想させるため^{注[3][3)}、そのものの認識が助けになって、親しまれやすく、色を効果的に伝達できる場合がある。しかし、その反面、色名が由来するものの認識(もしくは認識の偏り)に制約され、認知度が低く、色を効果的に伝達できないことも同様にありうる。さらに言えば、動物・植物・鉱物や自然現象などが人々の生活および文化と深く関わるため、同じものに由来する慣用色名でも、国や地域によって、使われ方が異なり、また、そこから思い浮かべられる色が異なることが考えられる。

本論文では、同じ物体名に由来する日本と中国の慣用色名を考察対象とし、両国で行った調査の結果を踏まえ、まず、言語学的角度から、物体色を表す言語表現の特徴、その表現における慣用色名の使われ方、および調査に用いた慣用色名の言語構造を論じる。次に、慣用色名の認知度を考察し、それに影響を及ぼす要因として、色名の言語構造や生活文化の特徴などを挙げる。さらに、色名の伝達能力という観点から、同じ物体名に由来する色名の代表色を中心に、慣用色名から思い浮かべられた色を比較する。最後に、日本と中国では、同じ物体名に由来する慣用色名の基準色に差があることを示す。

2. 調査

調査は、主に下記の2つの問題を解明するために実施した。

- ① 日中両国において、物体色はどのように表現

されるか。

- ② 同じ物体名に由来する慣用色名は、日中両国においてどの程度知られているか。また、それらは、どのような色をそれぞれの国において伝達するか。

調査に用いた物体名と色名は、両国とも25個であり、下に示すとおりである。

調査に用いた物体名(日本/中国 各25個)

1. 肌/肉(人的肌肤) 2. ネール/指甲 3. ワイン/葡萄酒 4. チョコレート/巧克力 5. 芥子/芥末 6. 茶/茶 7. スレート/石板 8. れんが(煉瓦)/火砖 9. 土/土 10. 空/天空 11. りんご/苹果 12. 桃/桃子 13. 柿/柿子 14. オレンジ/橘子 15. ストロベリー/草莓 16. レモン/柠檬 17. 栗/栗子 18. なす(茄子)/茄子 19. オリーブ/橄榄 20. ばら(薔薇)/玫瑰 21. ひまわり(向日葵)/向日葵 22. 桜/櫻花 23. 牡丹/牡丹 24. 草/草 25. チェリー/櫻桃

調査に用いた色名(日本/中国 各25個)

1. 肌色/肉色 2. ネールピンク/指甲紅 3. ワインレッド/葡萄酒紅 4. チョコレート/巧克力棕 5. 芥子色/芥黃 6. 茶色/茶褐 7. スレートグレイ/石板灰 8. れんが(煉瓦)色/火砖紅 9. 土色/土黃 10. 空色/天藍 11. アップルグリーン/苹果綠 12. 桃色/桃紅 13. 柿色/柿紅 14. オレンジ/橘橙 15. ストロベリー/草莓紅 16. レモンイエロー/柠檬黃 17. 栗色/栗棕 18. なす(茄子)紺/茄皮紫 19. オリーブ/橄榄綠 20. ばら(薔薇)色/玫瑰紅 21. ひまわり(向日葵)色/向日葵黃 22. 桜色/櫻花紅 23. 牡丹色/牡丹粉紅 24. 草色/草綠 25. チェリーピンク/櫻桃紅

上述した色名(各25個)は、「物体色の色名」に規定された日本の慣用色名(269個)と『中国色名総覧』に記載された中国の慣用色名(625個)の中から選んだ。選定基準は、同じ物体名に由来すること^{注[4]}、および、それらの物体名が生活の中で熟知されていることの2つである。色名が由来する物体名が生活の中で熟知されているかどうかを判定する際には、名取・近江の「熟知対象物」をある程度参考にした^{注[5][4) 5)}。「調査

に用いた物体名」とは、いま述べた2条件を満たす色名が由来する物体名(各25個)にほかならない。

被験者には、下に述べる2つの作業を面談の形で依頼した。

- ① 提示した25個の物体名について、それぞれから思い浮かべた色をできるだけ忠実に言葉で表現して回答欄に記入すること。(ただし、単に当該物体名に「色」を付け加えるだけの表現、例えば、「薔薇」に対して「薔薇色」などの表現は避けるよう要求した。)
- ② 提示した25個の慣用色名について、まず知っているかどうかを答えたあと、各色名から思い浮かべた色に最も近いと思われる色をカラーカードの中から1つ選び、その番号を回答用紙に記入すること。

調査に用いたカラーカード(22.5×35mm、196枚)は、前述した色名(両国とも25個)に対応する基準色を含む196色(有彩色185色、無彩色11色)であり、できる限り満遍なくマンセル色立体の中から選んだ。そのカラーカードを7枚の台紙(N8, 375×525mm)に分けて貼り付け、被験者に提示した。調査時には、蛍光灯と自然光を併用した。

調査は、2003年9月から11月にかけて、大阪(大阪市立大学・帝塚山学院)・北京(北京外国語大学・北京広播学院)・上海(上海外国語大学)で大学生を対象に実施した。有効調査数は、日本が135名(男性23名、女性112名)、中国が100名(男性32名、女性68名)であった。被験者の専攻は、主に生活科学・言語学・映画およびテレビ番組制作などである。いずれの国においても色彩学を専攻する者はいなかった。

3. 結果および考察

3.1 言語学的考察

本節では、25個の物体名から思い浮かべた色を被験者が言葉で表現した結果を、言語学的角度から考察する。特に、物体色を表す言語表現の特徴、色名の使われ方、および、慣用色名の言語構造について論じる。

3.1.1 物体色表現の言語構造

同じ物体名でもそこから思い浮かべられた色およびその色の表し方が人によって多少違うことが物体色

表現の結果から分かった。「空」から思い浮かべた色を表現した言葉を見ると、日本では「澄み渡った水色」と表現する人もいれば「白くかすんだ青色」と表現する人もいる。同様に、中国では「淡蓝」(うすい青)のように短く回答する人もいれば、修飾語をつけて「近乎透明的蓝色」(透明に近い青)と回答する人もいる。物体色を表すこのような言語表現を分析すると、「修飾語+基本語」という形がまず抽出された。したがって、第1段階では、被験者の言語表現を2つの要素に分けた。例えば、「空」の色に関する表現が「澄み渡った水色」である場合、それを「澄み渡った」と「水色」に分け、前者を「修飾語」、後者を「基本語」とした。結果的に、これは、「修飾語+基本色名」というJISの系統色名の表示法に似たものになったが、「基本色名」という語は使えなかった。基本色名に対応する部分に慣用色名なども用いられていたためである。本研究においては、1つの表現全体をまず「修飾語」と「基本語」に分け、そのうえで、両者をさらに細かく分けることにした。

a. 基本語の分類結果

基本語を、1) 基本色名^{注[6]}、2) 慣用色名、および、3) 基本色名にも慣用色名にも属さない「その他」に分けた。その結果は、図1と図2に示すとおりである。

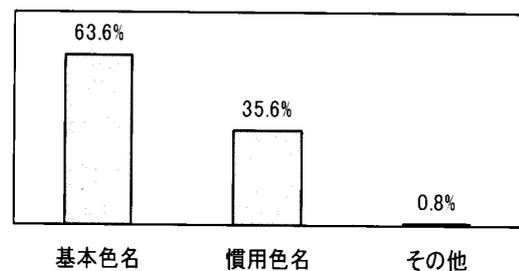


図1 基本語の分類結果(日本)

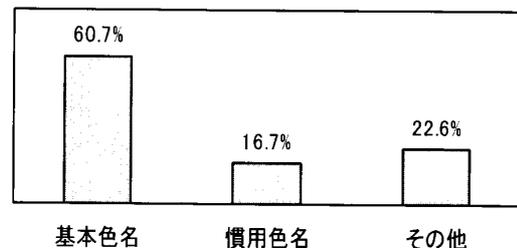


図2 基本語の分類結果(中国)

図1と図2から分かるように、基本語の中で最も多いのは基本色名であり、両国共に基本語全体の60%以上を占めた。慣用色名が使用された割合は、日本

では35.6%であるのに対し中国では16.7%であった。他方、「その他」の基本語は、日本ではわずか0.8%であるのに対し中国では22.6%も使われた。これらの結果から、日中両国において、物体色を表現する際の色名の使われ方が違うことが明らかになった。より詳しく述べれば、基本色名の使用頻度が類似している一方で、慣用色名の使用率には大きな違いがあることが明らかになった。

日本と中国で見られた基本色名の高い使用頻度は、物体色を表現する際の基本色名の実用性を示していると言えよう。日本工業規格と中国国家標準で規定されている基本色名はほぼ対応しており⁶⁾、それぞれ次に示すとおりである。

日本の基本色名 (JIS Z8102:2001「物体色の色名」による):

有彩色(10色) 赤・黄赤・黄・黄緑・緑・青緑・
青・青紫・紫・赤紫
無彩色(3色) 白・灰色・黒

中国の基本色名 (GB/T 15608-1995「中国 顔色体系」による):

有彩色(10色) 紅・紅黄・黄・黄緑・緑・緑藍
・藍・藍紫・紫・紫紅
無彩色(3色) 白色・灰色・黒色

一方、中国の慣用色名は、数においては日本の3倍以上あるにもかかわらず、その使用率は日本の2分の1にも達していない。『色譜』に収録された中国の色名の普遍性について考察する必要もあるが、1957年に収録されて久しいため、色名が実生活とかけ離れていることが推測される。このことは、基本色名にも慣用色名にも属さない「その他」の基本語が、日本に比べて中国では多く使われたこととも符合する。慣用色名の使用率が低い一方で、「その他」の基本語が多く使われたという事実は、新たな色名を定めるための調査が必要ではないかと考えさせる。

使われた「その他」の基本語は、日本が18語であり、中国が86語である。それらは2種類に大きくに分けられる。1つは、基本色名またはそれに近い色彩語彙を組み合わせたものであり^{注[7]}、もう1つは、慣用色名に類似したものである。より具体的に示すと、次のようになる。

日本の「その他」の基本語(合計18語):

- ① 基本色名またはそれに近い色彩語彙を新たに組み合わせたもの(1語)
黒紫色
- ② 慣用色名に類似したもの(17語)
赤褐色、赤ピンク、赤ワイン、オークル、黄金色、きつね色、黄橙、クリーム色、黒こげ茶、雑草色、芝色、白ピンク、炭、茶赤、茶褐色、乳白色、葡萄色

中国の「その他」の基本語(合計86語):

- ① 基本色名またはそれに近い色彩語彙を新たに組み合わせたもの(19語)
紅綠色、紅紫色、紅白色、紅灰色、紅黒色、黄紅色、緑黄色、藍灰色、紫黒色、灰黄、黒綠色、黒紫色、青黒色、青白色、灰青色、黒青色、青綠色、青黄、緑青色
- ② 慣用色名に類似したもの(67語)
粉色、粉藍、水粉、米色、米白、棕、棕黄、棕褐、棕黒、棕土色、金棕、紅棕色、黄棕、黄褐色、黄白色、乳黄色、枯黄、泥黄、蛋黄色、鵝黄、菊黄、黄澄色、肉白、肉粉色、肉紅色、酒紅、醬紅、棕紅、墨緑、絳紅、土色、泥土色、紅土色、土紅、土棕、奶白、烟灰色、土灰色、桔紅、桔色、橘紅色、橘黄色、橙色、橙黄、橙紅、墨紅色、墨黒色、乳黒色、灰咖啡色、湛藍、碧藍、蒼白、紅木色、紅褚色、血紅、葡萄紅、西洋紅色、火紅、杏紅、杏色、茄色、褐棕色、褐色、褐綠色、草青色、瓷白、卡奇色

b. 修飾語の分類結果

修飾語の部分は次の手順で分類した。(1)色の三属性、すなわち、色相・明度・彩度に関する表現を選び出す。(2)色の三属性に属さないものの中から感覚に関する表現を抽出し、さらにそれを「視覚」・「聴覚」・「触覚」・「嗅覚」・「味覚」の5つに分ける。(3)色の三属性にも感覚にも属さないものを「程度」に関する表現とそうでないものに分ける。(4)前述した(1)～(3)のいずれにも属さない表現を「その他」とする。なお、1つの物体色に対して複数の意味上独立した修飾語が用いられた場合には、それらを複数の修飾語と計算して分類した。分類の結果は、図3と図4に示すとおりである。

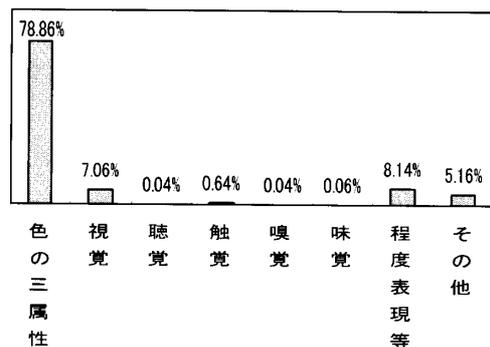


図3 修飾語の分類結果 (日本)

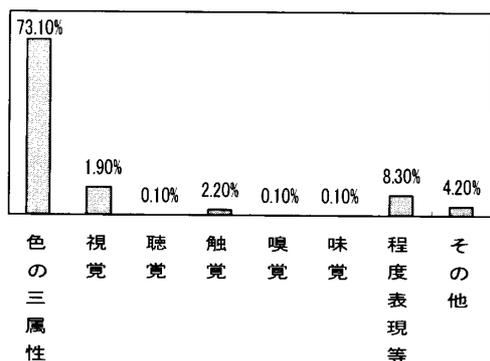


図4 修飾語の分類結果 (中国)

図3と図4が示すように、修飾語の使われ方は、両国でかなり類似しており、特に色の三属性に関する表現はいずれも70%以上用いられている。この結果から、色相・明度・彩度という色の三属性の認識が似ていることが伺える。両国の「その他」の修飾語には、次のような回答例が見られた。

日本：落ち着いた、日本的な、秋の、渋みのある、心が癒されるような、やさしい、かわいい、さわやかな、はつらつした、力強い

中国：有活力的(活気のある)、舒服的(心地よい)、漂亮的(綺麗な)、温和的(温和な)、深沉的(感情を表に出さない、意味ありげな)、清新的(清新な)、生动的(生き生きとした)、端庄的(きちんとして引き締まった)、典雅的(典雅な)、高贵的(気高い)

3.1.2 慣用色名の言語構造

複数の形態素からなる日中両国の慣用色名を比べると、中国の慣用色名は基本的に「玫瑰紅」のように、「物体名+基本色名」という言語構造を持つことが分かる。一方、日本の慣用色名は、外来語の場合、「物体名+基本色彩語」の形を持つ傾向があり^{注[8] 7)}、和

語の場合、「薔薇色」のように「物体名+色」と記述されるのがほとんどである。

既に述べたように、慣用色名は動物・植物・鉱物や自然現象などの「慣用的な呼び方」で表される色名である。「慣用的な呼び方」が指すものを認識できれば、それを参照点にして、色名が表す色をたやすくイメージできるが、逆に、「慣用的な呼び方」が指すものを知らない場合、色名が表す色を簡単には思い浮かべられないことが考えられる。しかし、同じくものを想起できない場合でも、「物体名+色」と記述される慣用色名よりも、「物体名+基本色名」または「物体名+基本色彩語」の構造を持つ慣用色名からのほうが、色名が表す色が推測しやすいと思われる。色名表現に含まれている「基本色名」または「基本色彩語」が色に関わる情報を提供してくれるからである。例えば、「スレート」というものを知らなくても、慣用色名「スレートグレイ」が与えられたなら、「グレイ」という基本色彩語がそこに含まれているため、その色名が表す色の見当をつけることができるであろう。このことは、次節で扱う色名の認知度とも関わってくる。

3.2 慣用色名の認知度

提示した25個の慣用色名を知っているかどうかに関する回答結果から、色名が知られている比率を算出した。各色名の認知度は、ここでは、色名が知られている比率によって示される。50%以上の被験者が知っている色名は、日本が18個であり、中国が21個である。比率が高い順に、それらの色名を大まかに100%~80%、80%未満~60%、60%未満~50%という3つのグループに分けると、表1のようになる。各色名の後の括弧にある数字は、色名が知られている比率を表す。

表1から分かるように、全体的には、日本に比べて中国の慣用色名は知られている比率がやや高い。つまり、中国の慣用色名は認知度の高いものがやや多い。

慣用色名は、色名そのものが日常生活の中で実用されればされるほどその認知度が高くなると思われる。色名の認知度は、実用性で決まるほか、前節で述べた色名の言語構造によっても影響される。日本の慣用色名が「物体名+色」または「物体名+基本色彩語」の形であるのに対し、中国の慣用色名はほとんど「物体名+基本色名」という構造を持つということ

は、いくぶん中国の慣用色名のやや高い認知度に影響しているであろう。

色名が由来するものの認識も、色名の認知度に関係することが調査の結果から明らかになった。ものの認識の違いは、また生活や文化の特徴を反映する。例えば、日本の「芥子色」と「桜色」は、いずれも知られている比率が88%であり、認知度の高い色名である。一方、それらに対応する中国語の色名、すなわち、「芥黄」と「桜花紅」は、知られている比率がそれぞれ26%と41%であり、より認知度が低い。この認知度の差は、生活や文化の違いによって、「芥子」と「桜」の認識が日中両国において異なることと関係していると思われる。日本では、からはよく食卓に上り、桜は日本の国花とされるほど重要な植物である。他方、中国では、桜は珍しい植物であり、からしが一緒に出てくるような料理はあまりない。また、同じ「りんご」に由来する色名として、中国語の「苹果绿」が88%の比率で知られているのに対して、日本の「アップルグリーン」は42%という低い認知度である。この差も、色名が由来するものの認識の違いによると考えられる。「りんご」といえば、中国では、「緑」、「黄色」、「赤」などの色が思い浮かべられるが、日本では、「グリーン」ではなく、「赤」のイメージが強いように思われる。それゆえ、「アップルグリーン」と

いう色名を目にした時、「りんご」と「グリーン」の組み合わせからは、明確な色をどうしてもイメージできない日本人の被験者が多かったのかもしれない。

3.3 色名が表す色

ここまでは、慣用色名の言語構造やその認知度などを考察した。では、同じ物体名に由来する日本と中国の慣用色名は、どのような色を伝達するであろうか。色名から被験者たちが思い浮かべた色、および、色名について国の規格協会などが定めた色を比較してみよう。

3.3.1 思い浮かべられた色

a. 色名の代表色

日本人の被験者と中国人の被験者が同じ物体名に由来する慣用色名から思い浮かべた色は、一致する

表1 50%以上の被験者が知っている慣用色名およびその認知度

色名	国名	
	日本	中国
100%~80% (両国とも11個)	桃色(100%), オレンジ(100%), 肌色(99%), 茶色(99%), ワインレッド(95%), 空色(90%), 芥子色(88%), 桜色(88%), レモンイエロー(87%), 薔薇色(81%)	天藍(98%), 肉色(97%), 土黄(97%), 玫瑰紅(96%), 草緑(92%), 桃紅(90%), 苹果綠(88%), 柠檬黄(85%), 葡萄酒紅(84%), 橘橙(84%), 橄欖綠(80%)
80%未満~60% (日本6個/中国9個)	柿色(76%), 栗色(76%), れんが色(76%), 土色(76%), 草色(65%), オリーブ(62%)	巧克力棕(77%), 火磚紅(75%), 櫻桃紅(73%), 草莓紅(72%), 茄皮紫(71%), 茶褐(67%), 向日葵黃(67%), 柿紅(62%), 栗棕(61%)
60%未満~50% (両国とも1個)	ストロベリー(59%)	石板灰(56%)

表2 色名の代表色のマンセル値

番号	色名	Hue		Value		Chroma	
		日/中	日/中	日/中	日/中		
1	肌色/肉色	2.5YR	2.5YR	8	8	4	4
2	ネールピンク/指甲紅	5.0R	5.0R	8	8	6	6
3	ワインレッド/葡萄酒紅	10.0RP	10.0RP	3	3	8	8
4	チョコレート/巧克力棕	10.0R	10.0R	4	4	6	6
5	芥子色/芥黄	7.5Y	2.5Y	8	8	12	8
6	茶色/茶褐	10.0R	7.5Y	4	4	6	6
7	スレートグレイ/石板灰	N	N	6	7		
8	れんが色/火磚紅	10.0R	10.0R	4	5	6	12
9	土色/土黄	7.5YR	10.0YR	4	6	6	8
10	空色/天藍	10.0B	10.0B	8	8	4	4
11	アップルグリーン/苹果綠	5.0GY	7.5GY	8	7	8	8
12	桃色/桃紅	5.0RP	10.0RP	7	7	8	8
13	柿色/柿紅	5.0YR	7.5R	6	5	12	14
14	オレンジ/橘橙	5.0YR	5.0YR	7	7	12	12
15	ストロベリー/草莓紅	1.25R	1.25R	4	4	14	14
16	レモンイエロー/柠檬黄	5.0Y	2.5Y	9	8	3	12
17	紫色/栗棕	7.5YR	10.0R	5	4	8	6
18	茄子紺/茄皮紫	5.0PB	7.5P	2	2	4	4
19	オリーブ/橄欖綠	7.5Y	5.0GY	3	5	4	6
20	薔薇色/玫瑰紅	5.0R	3.75R	4	4	12	12
21	向日葵色/向日葵黄	2.5Y	2.5Y	8	8	14	14
22	桜色/桜花紅	10.0RP	5.0RP	9	7	2	8
23	牡丹色/牡丹粉紅	1.25R	10.0RP	4	8	14	6
24	草色/草綠	5.0GY	7.5GY	7	7	8	8
25	チェリーピンク/櫻桃紅	6.25RP	1.25R	5	4	12	14

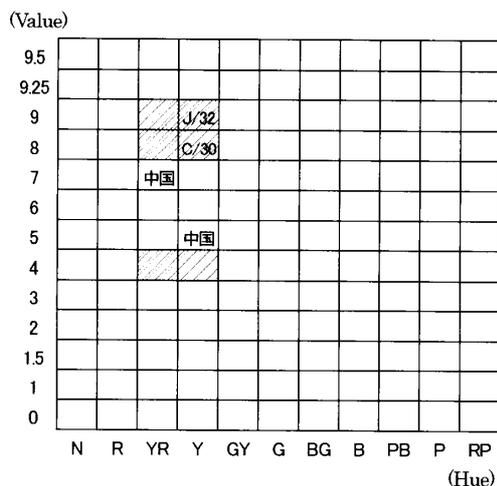
こともあれば異なることもある。それらを1つ1つ比較しても大きな意味がないので、ここでは、色名から最も多くの被験者が思い浮かべた色（「色名の代表色」と仮称する）のみを比較することにする。25個の色名の代表色をマンセル値で表すと、表2ようになる。

表2に示すように、25色名のうち、両国で代表色が一致するのは、8組であり、それぞれ「肌色／肉色」、「ネイルピンク／指甲紅」、「ワインレッド／葡萄酒紅」、「チョコレート／巧克力棕」、「空色／天藍」、「オレンジ／橘橙」、「ストロベリー／草莓紅」、「向日葵色／向日葵黄」である。同じ物体名に由来する日中慣用色名の代表色が一致するのは、それらの色名が表す色の認識が両国で類似しているからだと考えられる。

そのほか、色相が同じ色名は1組（れんが色／火砖紅）、明度が同じ色名は6組（芥子色／芥黄、茶色／茶褐、桃色／桃紅、茄子紺／茄皮紫、薔薇色／玫瑰紅、草色／草緑）、彩度が同じ色名は6組（茶色／茶褐、アップルグリーン／苹果緑、桃色／桃紅、茄子紺／茄皮紫、薔薇色／玫瑰紅、草色／草緑）である。

b. 色名の色領域

色名から思い浮かべられた全ての色の色立体にお



色領域図 (5-8) における凡例

網かけ：日中共通の色領域（日中両国による選択色分布）

日本：日本独自の色領域（日本人のみによる選択色分布）

中国：中国独自の色領域（中国人のみによる選択色分布）

J/数字：日本の代表色（最頻選択色）、数字は回答者数。

C/数字：中国の代表色（最頻選択色）、数字は回答者数。

図5 「レモンイエロー」と「檸檬黄」の色領域
(Hue-Value)

ける分布範囲を、その色名の「色領域」と呼ぶ。同じ物体名に由来する日本と中国の色名は、共通の色領域を有しながら独自の色領域を持つこと、および、色名によって色領域が広がったり狭かったりすることが、今回の調査で明らかになった。

25色名のうち、色領域が狭いことが明らかになったレモンイエロー／檸檬黄、および、色領域が広いことが明らかになった牡丹色／牡丹粉紅を例に、色領域を示すことにする。

図5と図6はレモンイエロー／檸檬黄の色領域を、図7と図8は牡丹色／牡丹粉紅の色領域を、それぞれ「色相－明度 (Hue-Value)」と「色相－彩度 (Hue-Chroma)」の関係から示している。色領域図では、「日本」と「中国」はそれぞれ両国の色名が持つ独自の色領域を表す。両国の色名が有する共通の色領域は網かけで表示する。共通の色領域に位置する「J/数字」は「日本の代表色（最頻選択色）／代表色の回答者数」、「C/数字」は「中国の代表色（最頻選択色）／代表色の回答者数」をそれぞれ意味する。

図5と図6から、「レモン」に由来する「レモンイエロー」と「檸檬黄」のそれぞれから両国の被験者が思い浮かべた色は、色相がYRとYに集中している点では似ていることが分かる。一方、明度と彩度からみれば、明度分布は4・5・7・8・9、彩度分布は3・4・6・8・12・14というように広がっている。図5では、「色相がY、明度が5」および「色相がYR、明度が7」の2箇所が中国独自の色領域である。図6においては、中国独自の色領域は見られないが、日本独自の色領域は「色相がY、彩度が4」のところに現われた。両色名の代表色は、いずれもY色相にあるが、マンセル値で表すと、「レモンイエロー」は5.0Y 9/

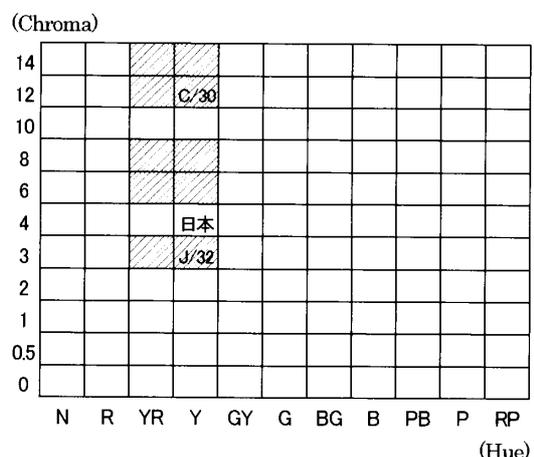


図6 「レモンイエロー」と「檸檬黄」の色領域
(Hue-Chroma)

3であり、「檸檬黄」は2.5Y 8/12である。明度も彩度も異なっている。日本の「レモンイエロー」は、本来レモンの果皮の色を指し、かなり高彩度の色(マンセル値が7.5Y 8/12)であるが、代表色として低彩度の色が選ばれたのは、日本人の若者がレモンジュースなどの飲料の色に影響されているからかもしれない。

図7と図8から、「牡丹」に由来する日本の「牡丹色」と中国の「牡丹粉红」から思い浮かべられた色は、分散しており、相当に異なっていることが明らかである。図7においても図8においても、中国独自の色領域は見られないが、日本独自の色領域は多く現われた。両色名の代表色は、色相・明度・彩度の三属性のいずれにおいても異なっている。代表色のマンセル値は、「牡丹色」が1.25R 4/14、「牡丹粉红」が10.0RP 8/6であった。

日中両国において、同じであったり異なったりすることが分かる。「レモン」に由来する「レモンイエロー」と「檸檬黄」から思い浮かべられた色の色相分布が両国で似ているのは、「レモン」というものの認識が両国で類似しているからであろう。他方、「牡丹」に由来する「牡丹色」と「牡丹粉红」から思い浮かべられた色が両国でかけ離れているのは、「牡丹」というものの認識が両国で大いに異なっているからだと思われる。日本の「牡丹色」は、「白・紅・紫・黄色などの大形の花が開くボタン科の落葉低木ボタン(牡丹)のうち、紫がかった紅色の花のような色を言う」とされている⁸⁾。他方、中国の「牡丹粉红」は、「粉红」が示すとおりピンク色をした牡丹の花の色を指す。さらに、「牡丹色」が独自の色領域を広く持っているのに対して、「牡丹粉红」に独自の色領域が見られないということは、色名の言語構造の違いと多かれ少なかれ関わっている

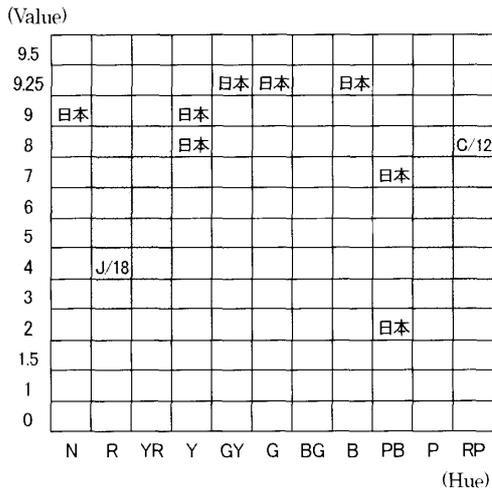


図7 「牡丹色」と「牡丹粉红」の色領域(Hue-Value)

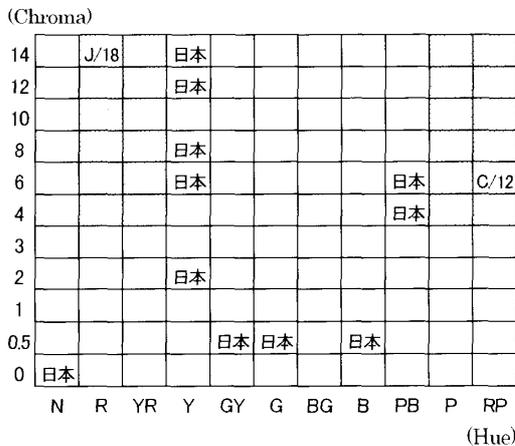


図8 「牡丹色」と「牡丹粉红」の色領域(Hue-Chroma)

上に示した4つの色領域図から、同じ物体名に由来する慣用色名でも、そこから思い浮かべられる色が

表3 色名の基準色のマンセル値

番号	色名	Hue		Value		Chroma	
		日本/中国	日 中	日 中	日 中		
1	肌色/肉色	5.0YR	5.0YR	8	8	6	6
2	ネールピンク/指甲紅	10.0R	7.5R	8	8	4	4
3	ワインレッド/葡萄酒紅	10.0RP	5.0RP	3	3	8	8
4	チョコレート/巧克力棕	10.0R	10.0R	2	3	2	3
5	芥子色/芥黄	2.5Y	5.0Y	7	6	6	8
6	茶色/茶褐	5.0YR	7.5YR	3	4	4	4
7	スレートグレイ/石版灰	2.5PB	5.0YR	3	5	2	1
8	れんが色/火城紅	10.0R	10.0R	4	5	6	8
9	土色/土黄	7.5YR	2.5Y	5	6	8	6
10	空色/天藍	10.0B	2.5PB	7	5	6	8
11	アップルグリーン/苹果緑	10.0GY	7.5GY	8	7	6	8
12	桃色/桃紅	2.5R	5.0R	6	7	8	8
13	柿色/柿紅	10.0R	5.0R	5	6	12	12
14	オレンジ/橘橙	5.0YR	5.0YR	7	7	12	12
15	ストロベリー/草莓紅	1.25R	7.5R	4	6	11	12
16	レモンイエロー/檸檬黄	7.5Y	2.5Y	8	8	12	8
17	紫色/紫棕	2.5YR	7.5R	3	3	4	4
18	茄子紺/茄皮紫	7.5P	10.0RP	2	3	2	6
19	オリーブ/橄欖緑	7.5Y	10.0Y	3	4	1	6
20	薔薇色/玫瑰紅	1.25R	2.5RP	5	5	12	12
21	向日葵色/向日葵黄	2.5Y	2.5Y	8	8	11	12
22	桜色/櫻桃紅	10.0RP	2.5R	9	8	2	2
23	牡丹色/牡丹紅	2.5RP	2.5R	5	8	11	6
24	草色/草緑	5.0GY	10.0GY	5	4	6	6
25	チェリーピンク/櫻桃紅	6.25RP	5.0R	5	4	12	12

のではないかと思われる。

3.3.2 定められた色

慣用色名の代表的な色記号として定められたマンセル値が表す色を^{注[9]}、その色名の基準色と呼ぶ。調査に用いた25色名の基準色のマンセル値は、表3に示すとおりである。

表3によれば、両国で基準色が一致する色名は2組あり、それぞれ「肌色／肉色」と「オレンジ／橘橙」である。そのほか、色相が同じ色名は3組（チョコレート／巧克力棕、れんが色／火砖红、向日葵色／向日葵黄）、明度が同じ色名は6組（ネールピンク／指甲红、ワインレッド／葡萄酒红、レモンイエロー／柠檬黄、栗色／栗棕、薔薇色／玫瑰红、向日葵色／向日葵黄）、彩度が同じ色名は10組（ネールピンク／指甲红、ワインレッド／葡萄酒红、茶色／茶褐、桃色／桃红、柿色／柿红、栗色／栗棕、薔薇色／玫瑰红、桜色／樱花红、草色／草绿、チェリーピンク／櫻桃红）である。

3.3.3 基準色と代表色の関係

同じものに由来する慣用色名が表す色が、代表色のみならず、基準色においても日本と中国で異なることがあるということは、既に表2と表3によって明示された。続いて、代表色と基準色の関係を見てみよう。

同じ色名の基準色とその代表色が一致するものは、25色名のうち、日本が8個、中国が2個であった。このことは、「3.1.1 物体色表現の言語構造」のところで見た中国の慣用色名の低い使用率が示したと符合しているように思われる。すなわち、日本の慣用色名は適宜改訂されたため、基準色がより実生活に密接しているが、中国の慣用色名は古いため、その基準色が実生活とかけ離れているということが考えられる。他方、日本と中国において基準色が一致するのは2色名であるが、代表色が一致するのは8色名であることが明らかになった。これは、色名について定められた日本と中国の基準色には相当な差があることを示唆している。

この差の原因を探ると、少なくとも2つ考えられる。1つは前述した中国の基準色が実生活とかけ離れていること、もう1つは『色譜』の色表現の限度である。『中国色名綜覧』のなかの「色譜概要」に「本の体裁は、製版・印刷で使用されるカラー・チャートに似てい

る」などの記述があることから、『色譜』が印刷インクによる網点のかけ合わせで色を出したことが分かる。印刷で表現された『色譜』の色から視感測色で求められたマンセル値が『中国色名綜覧』における中国色名の「代表的な色記号」になったようである。このような色表現と色数値化の事情も、中国の基準色と日本の基準色の差に関係しているであろう。また、中国の基準色と代表色に差があるのもこのことと関連があるかもしれない。

4. おわりに

本論文では、同じ物体名に由来する日本と中国の慣用色名（各25個）について、それらの使用率・言語構造・認知度・伝達能力などを中心に考察した。その結果、下に述べることが明らかになった。

- (1) 日本に比べ、中国の慣用色名は使用率が低い。
- (2) 日本の慣用色名は「物体名＋色」または「物体名＋基本色彩語」の形で記述されているが、中国の慣用色名はほとんどが「物体名＋基本色名」という言語構造を持つ。
- (3) 全体的に見ると、中国の慣用色名は認知度の高いものがやや多い。しかし、日本の生活や文化を特徴づけるようなもの（言い換えれば、中国の生活や文化を特徴づけられないもの）に由来する慣用色名の場合は、中国での認知度が低い。
- (4) 基準色と代表色が一致する慣用色名は日本のほうがより多い。

この4点を総合して考えると、次のように結論づけることができよう。

- a. 慣用色名の認知度や伝達能力に影響する根本的な要因は色名が由来するものの認識にほかならない。認識の様態によって、色名はよく知られて色を効果的に伝達できる場合もあれば、あまり知られず色を効果的に伝達できない場合もある。
- b. 慣用色名は、文化に依存するため、異文化コミュニケーションにおいては色の情報を正確に伝達できないことがある。したがって、慣用色名が実際に表す色を文化ごとに把握し、資料として広めることが重要である。
- c. 日本の慣用色名は実用性と伝達能力が高いが、中国の慣用色名は策定が古く現在の使用状況と乖離

している。中国の慣用色名について、再調査を行い、そのデータを色名事典としてまとめることができれば、慣用色名による日中間の色伝達はより誤解少なく実現できると思われる。

注

- [1] これらの名詞の中には、動物・植物・鉱物や自然現象などの全体を表すものもあれば、一部を表すものもある。例えば、「空色」および「土色」の「空」と「土」は前者の例、「鳩羽色」および「桜色」の「鳩羽」と「桜」は後者の例である。とくに「桜色」の「桜」は「桜の花」を換喩的に表現している点において興味深い。
- [2] 『中国色名綜覧』に収録された中国色名は、『色譜』によっており、同じく625個である。
- [3] 参照点による認知プロセスについては、Langacker (1993) を参照されたい。
- [4] 慣用色名を表すのに使われた物体名は、日中両国で同じものが56個あった。ただし、同じ物体名に由来する色名が複数あっても1回と数えた。同じ物体名に由来する色名が複数ある場合、次のように調査に用いる色名と物体名を決めた。
- 両国で色が近い色名を使用する。例えば、「りんご」に由来する色名は、日本が「アップルグリーン」1つしかないのに対して、中国は「苹果绿」と「苹果红」の2つがあるが、「アップルグリーン」の色に近いほうである「苹果绿」を用いた。
 - 同じ国でも同じ物体名に由来する、しかもマンセル値が同じ色名が複数ある場合、日常生活によく使われると思われるほうを使用した。例えば、「草」に由来する日本語色名には、マンセル値が同じである「草色」と「グラスグリーン」があるが、「草色」を用いることにした。また、物体名の調査には、「グラス」ではなく「草」を使用した。
- [5] 本研究に用いた25個の物体名のうち、20個は名取・近江の「熟知対象物」と重なったが、その他は筆者らの判断によるものである。(ただし、実際に調査を行ったところ、日本では「スレート」を知っている被験者が少なく、中国では「芥末」(芥子)があまり知られていないことが分かった。)
- [6] 基本色名は、日本の場合、「物体色の色名」(JIS Z8102: 2001)に規定されているものである。

中国の場合は、中華人民共和国国家標準GB/T 15608-1995「中国颜色体系」において規定されている「基本色」を指す。

- [7] 基本色名に近い色彩語彙は、ここでは主に中国語の「青」を指す。現代中国語では、「青」は「緑」、「青」、「黒」などの色を表すことができる。
- [8] 基本色彩語は、Berlin & Kay (1969) で挙げられた11のbasic color terms (white, black, red, yellow, green, blue, brown, purple, pink, orange, grey) に対応するカタカナ語を指す。
- [9] 色名の代表的な色記号として示されたマンセル値は、日本の場合、「物体色の色名」(JIS Z8102: 2001)に、中国の場合、『中国色名綜覧』に、それぞれ従った。

謝辞

本論文執筆中に貴重な助言をくださった芝原宏治氏(関西外国語大学外国語学部教授・大阪市立大学名誉教授)および酒井英樹氏(大阪市立大学大学院生活科学研究科講師)に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) JIS Z8102-2001: 物体色の色名
- 2) 海上雅臣(編): 中国色名綜覧. カラープランニングセンター(1979)
- 3) Langacker, Ronald W.: Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics*, 4-1 (1993) 1-38
- 4) 名取和幸, 近江源太郎: 記憶色の現象的特徴に関する研究(第1報) 一様々な熟知対象物における記憶色とその測定における若干の問題点一. *色彩研究*, 47-2 (2000), 7-18
- 5) 名取和幸, 近江源太郎: 記憶色の現象的特徴に関する研究(第2報) 熟知対象物に由来する色名と記憶色との関係. *色彩研究*, 49-1 (2002), 13-19
- 6) 中华人民共和国国家标准 GB/T 15608-1995: 中国颜色体系
- 7) Berlin, Brent & Paul Kay: Basic Color Terms. CSLI Publications (1991)
- 8) 永田泰弘(監修): 日本の269色. 小学館(2002)

(投稿受付日: 2005年8月1日)

(採録決定日: 2005年11月11日)

著者紹介



リン ランケン
林 嵐娟

1975年8月22日生
2004年大阪市立大学大学院生活
科学研究科
居住環境コース前期博士課程終了
修士（学術）

日本色彩学会

現在、大阪市立大学大学院文学研究科言語情報学専
修後期博士課程2年在籍



さとう まさこ
佐藤 昌子

1941年3月4日生
1963年大阪市立大学家政学部被
服学科卒業
日本色彩学会、日本家政学会、日
本繊維学会、日本繊維製品消費科
学会、日本照明学会、日本生理人類学会、情報処理
学会、日本デザイン学会。

学術博士

大阪市立大学大学院生活科学研究科教授を経て、現
在、畿央大学健康科学部教授